

中耕・培土は2回 適期に実施しよう！

大豆は中耕・培土の実施の有無で生育に大きな違いが出ます。

- ・根域拡大・根粒菌の着生活性・除草・倒伏防止のため、中耕・培土を2回実施しましょう。
- ・1回目の中耕・培土は、適期から遅れないように作業を進めましょう。
- ・培土により根圏の発達を促進し、夏期の干ばつに強い大豆を作りましょう。

1 中耕・培土

5つの
効果

除草

倒伏防止

湿害軽減

根粒菌の活性化

根の発達促進

(1) 作業の適期

中耕・培土の作業時期のめやす

管理作業	大豆の生育と作業内容	は種後日数 (目安)
1回目	第2本葉展開期 (主茎長 12~15cm) ⇒ 子葉節まで土寄せ	20~25日頃
2回目	第5本葉展開期 (主茎長(地際から)20~30cm) ⇒ 初生葉節まで土寄せ	35~40日頃 (1回目から14日後)

(2) 作業のポイント

ア 株元までしっかり覆うよう土寄せする

株元がへこむと、培土効果が発揮されない
うえ、株元に水が溜まり病害を招くおそれがある。

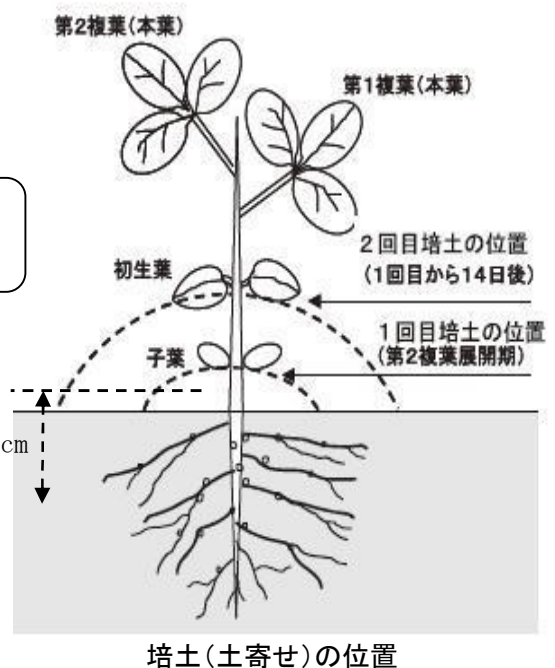
特に、畝立ては種では株元にしっかり
土寄せを行きましょう。

イ 最終培土の高さは15cm程度とする

収穫時の土のかき込みによる汚粒発生防
止のため15cm程度とし、高くしすぎない。15cm

ウ 必要により早めの培土を行う

極端に雑草の発生が多いときや連続降雨
が予想されるときは、早めに培土を実施す
る。



エ 培土は開花始めまでに終了

開花期以降の培土は根を切断しやすく、生育抑制や落花につながるため、培土作業は開花始め（最初の花が見られる時期）までに終了する。

2 梅雨時期の排水対策

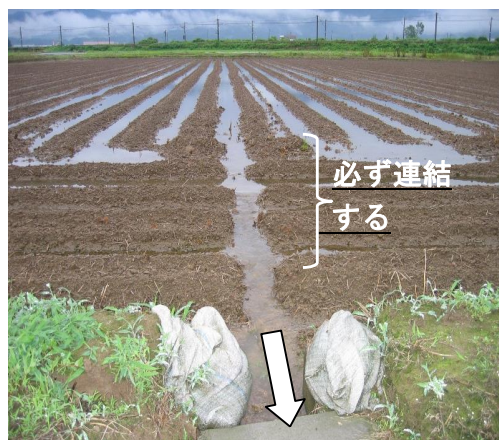
(1) 排水対策の必要性

ほ場内の停滞水は、湿害による生育阻害や病害の発生を助長するため、排水対策を徹底する。

(2) 雨水の排水を徹底

ア 培土後の溝は、明きよや排水溝に連結する。
畝立ては種したほ場では、畝間を排水路に連結する。

イ 大雨の後には、安全確認を十分に行ったうえで、水路、ほ場内の排水溝の整備・点検を行う。



排水路

3 アブラムシ類の防除（褐斑粒対策）

- (1) アブラムシ類が媒介するウイルスに感染すると、褐斑粒が発生し、品質低下の原因となる。発生動向に注意し、多発生の傾向が見られたら速やかに薬剤防除を行う。
- (2) ウイルス病株（モザイク株）は見つけ次第抜き取る。

4 雑草対策

- (1) 生育期の雑草対策は、中耕・培土が基本となる。降雨等の影響で作業が遅れ、雑草が抑えられない場合は、草種に応じた茎葉処理除草剤を遅れずに散布する。
- (2) 非選択性の茎葉処理除草剤を使用する場合は、飛散防止カバーを使用し、大豆や周辺の作物にかからないよう十分注意して散布する。

難防除雑草について

帰化アサガオ類（マルバルコウ、マメアサガオ、アメリカアサガオ）やツユクサ類、アレチウリ、イヌホオズキ等は、大豆ほ場に侵入すると防除が難しく、減収の要因となる。特に、帰化アサガオ類は被害が大きくなるため、開花期までに除去する。

5 追肥

- (1) 湿害による黄化や生育不良などの症状が見られた場合は、排水が完了した後、速効性肥料を追肥（窒素成分で1～3 kg/10a）し、生育の回復を図る。
- (2) ちりめんじわ粒発生軽減や増収のため、地力が低いほ場では緩効性肥料（シグモイド型被覆尿素 60 日タイプ 窒素成分で6～8 kg/10a）を施用した後、2回目の中耕・培土を行う。ただし、基肥に緩効性肥料を施用した場合は行わない。

農作業時の熱中症に注意しましょう。こまめな休息と水分補給が大切です。